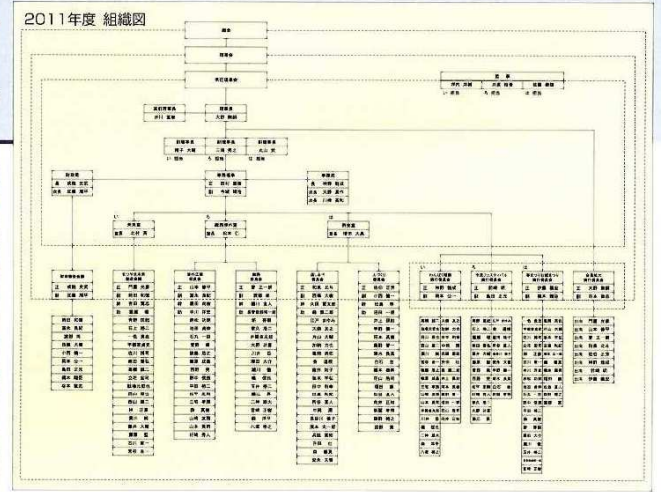




明るく元気に前向きに!!  
住みなすものは心なりけり

### 2011年 松山市の動き

- 3月 北条スポーツセンター整備完了
- 4月 子規記念博物館開館30周年
- 8月 サクラメント市と姉妹都市提携30周年



### 出来事

- 1月** ●第1回定時総会・例会 (松山全日空ホテル)  
●京都会議
- 2月** ●愛媛マラソン支援  
●例会「委員会対抗ゲーム」(松山市総合コミュニティセンター)
- 3月** ●東日本大震災発生  
●例会「第2エリア合同方式訪問例会」(今治国際ホテル)
- 4月** ●東日本大震災復興支援街頭募金 (松山春まつりお城まつり中止)  
●わかっぱきファンド受給者証授与式  
●例会「新入会員目標55名達成するために」(松山市総合コミュニティセンター)
- 5月** ●憲法タウンミーティング  
●例会「『生きる』を考える」(松山市総合コミュニティセンター)  
●第60回JCI ASPAC マニラ
- 6月** ●第41回四国地区愛媛ブロック会員大会 (今治)  
●第24回わんぱく相撲まつり大会  
●例会「『思いやり』を考える」(松山市総合コミュニティセンター)  
●四国地区会員大会 (西条)
- 7月** ●第63回全国会員大会主管立候補松山現地調査  
●サマーコンファレンス (横浜)  
●第1回臨時総会・例会「明るさが生み出す人間関係」(松山市総合コミュニティセンター)
- 8月** ●松山JCI創立記念パーティ  
●第27回わんぱく相撲全国大会  
●例会「家族例会」(北条鹿島)
- 9月** ●第28回まつやま市民シンポジウム  
●第2回臨時総会・例会「学んで作る元気な体」(松山市総合コミュニティセンター)  
●愛媛ブロックスポーツ交流大会 (宇和島)  
●第60回日本JC全国会員大会 (名古屋)  
●第63回全国会員大会開催地が松山に決定
- 10月** ●例会「『リーダー』を考える」(本町会館)  
●第27回全国JCサッカー選手権大会  
●第66回JCI世界会議 (ブリュッセル)
- 11月** ●第2回定時総会・例会「前向きに」(ホテル奥道後)
- 12月** ●例会「卒業式・懇親会」(松山全日空ホテル)



1月 握手する井川豊樹日本JCI副委員長と大野剛嗣理事長 (京都会議)



2月 前年に引き続き「いもたぎ」のお接待 (愛媛マラソン)



4月 東日本大震災復興支援の街頭募金



5月 復興支援を世界にアピール (JCI ASPAC マニラ)



6月 28小学校178名のわんぱくカ士が参加



8月 宝探し・ビーチフラッグス・すいか割りを楽しんだ家族例会



9月 第63回全国会員大会が松山に決まったことを報告



9月 基調講演の福岡政行氏と松山JCIメンバー (市民シンポジウム)



9月 サーキット場で開催されたスポーツ交流大会で見事優勝



11月 「心を静める」ために座禅を組む (11月例会)

## 社団法人松山青年会議所2011年度理事長所信

社団法人松山青年会議所

大野 剛嗣

### はじめに

昭和 27 年に設立された松山 J C は、時代と共に地域の明るい豊かな社会を目指すため、JC としての姿を模索しながら活動してきた。戦後の日本も高度経済成長を通じて経済の発展と共に豊かな社会を形成したかのように思えた。

しかし、自ら命を絶つ若者が増え続けるといった精神的に貧困な社会になってしまった。情報技術によって中央と地方の情報の壁は無くなってはきたが、地方に住む若者は、六本木ヒルズに幸せがあるように錯覚して、自分が生活している社会との格差だけをみて、生きる指標を見失いつつある。

私は幼い頃、姉と 2 人で祖母の家にあずけられることが多かった。両親は共働きで10余名の社員と朝から晩まで働き、親父は仕事が終わっても地下足袋を履いたまま寝るくらいの忙しきで会社の切り盛りをしていた。そのせいか祖母には甘やかされたが、忙しい両親は私と話をする機会が少ない中で、「生きていくためには」と次のようなことをよく話していた。

「学校には勉強をしに行くんじゃなく友達をつくりに行け。人には向き不向きがあるから自分に向いた好きなことを見つけてそれを極めろ。人のマネばかりせず工夫しろ。自分で責任をとれるならやりたいことは何だってやれ。そのかわり人様に迷惑をかけちゃ駄目だ」

荒々しい言葉だったが、とても意味深い、ありがたい親の言葉であったと今更ながらに身に染みている。

社会に出ても人間ひとりの力なんてたかがしれている。協力し合える人間関係づくりが大切だ。世の中では競争相手が多いので、すべての能力の平均点が高いことより、何か1つだけでいいからずば抜けた能力の持ち主の方が生き残ることができる。人に迷惑をかけることなく相手を思いやる心がないと結局は行き詰まって駄目になる。そんなことを私に親は言いたかったのだろう。

その後、家庭の事情で母と姉との3人で暮らすこととなった。厳しい経済状況であったが、私が興味を示すことは、なんでも他の子ども以上にさせてもらった。それは、生きていく中での基力となる幼い頃の教育は、長い人生で非常に大切だからであり、子どもへの投資は惜しまないという親ごころだったのだろう。

物心ついてからは、すべてのことを自分で判断するように任された。その中で、努力することなく頭で「駄目だ」とあきらめた瞬間、自分で「ここまで！」と限界を決めてしまうので絶対と言っていいほど物事はそれ以上のことにはならないということを理解していった。

私たち青年は、自分で限界を決めてしまうほど経験を積んでいないのに、なぜもっと前向きになれないのだろうかと考えるようになった。

## 住みなすものは心なりけり

この所信を考えるにあたって非常に感銘を受けた言葉がある。

### おもしろき こともなき世を おもしろく

維新の志士、高杉晋作の辞世の句である。

ひと昔まえ、この国や地域を憂い、世の中を変えてやろうという“志”をもった青年が JC を創り、今日の JC がある。JC 設立当初、青年が主導する団体は JC しかなかった。故に、戦後という混乱期において、混沌という未知の可能性を自らの手で切り拓く気概をもった青年は、自然と JC に集まってきた。

時代は変わり、本当の意味で明日食べるものに困ることはほとんどなくなった。最近是不況や不景気と言われているが、世界的に見れば未だに豊かで幸福な国である。現在の様々な問題は、生きていくことにあまり関わりのないところが原因で起こっている。「むかつくから」「お金が欲しかったから」という軽い動機での犯罪。現実と向き合おうとせず家族に寄生するニートや引きこもり。恥を知らない行動。自分事以外への無関心が横行している。また、私たち JC はどうだろうか。礼儀の心を忘れていないだろうか。会員数の減少や入会年齢の高齢化。退会者や幽霊会員の増加。ルールや期限を守らない。品格を問われる行いをする。自分が関わっていない事業に対しても無関心だ。

高杉の句には、下の句がある。

### 住みなすものは 心なりけり

この下の句は、高杉の晩年を世話したという野村望東尼が詠んだ。「この世をおもしろくするのもしないのも、また、おもしろいと感じるのも感じないのも自らの“心”次第である」という意味である。

今起きていることは、誰にとっても等しく現実である。だが、その現実をどうとらえるかは自分の“心”次第である。世の中の問題も、JC の現状も、そして自分自身のことも、自分の“心”の持ちようで見方は大きく変わる。当事者意識無く他人事に思っていると、今起きている問題に愚痴を言うことはあっても、自らが挑戦するという選択肢がなくなってしまうのである。逆に、前向きに物事を考えていると、「ピンチはチャンスだ」と行動を起こし、他人からの自分に対するちょっとした行為に感謝することができるのである。

### おもしろき この世をさらに おもしろく

### 住みなすものは 心なりけり

私は、常に自分の心の持ちようを、「明るく、元気に、前向きに」保つように心がけている。さらに自分だけでは見方が偏るので、JC 内外を問わず、第三者の意見を参考にするようにしている。皆さんも青年としての基力を忘れず、何事にも「明るく、元気に、前向きに」考え、気力を持って困難に挑戦していただきたい。そして仲間と協力し合い、みんなに誇れるまつやまを創っていこうではないか。

## 感謝の気持ちを忘れず、基力を成長させよう

人は、多くの人に支えられて生きている。特に私たち JAYCEE は、会社の仲間、家族に支えられている。その支えがあるからこそ、私たちは JC 活動ができるのであり、そのことを片時も忘れてはならない。そして、心の中で忘れないようにするだけではなく、自分の気持ちを伝えるという行動を起こさなければ、なかなか相手に伝わらないものだ。恥ずかしがらず、改めてその人たちに感謝の気持ちを伝える機会を作ろうではないか。

私は自分を支えてくれている人を幸せにできない人は、地域を幸せにすることはできないと考える。周りの人が幸せで笑顔の絶えない環境であるからこそ、自分も前向きに物事を考えることができるのだ。だから、そのような環境があってはじめて、人や社会の役に立つような仕事ができるのである。

また、どんなに頑張っても JC だけで食べていけるわけではない。また、JC を頑張りすぎて私たちの生活の基盤である家庭や会社をなくすことになっても、結局は地域のためにはならない。

私は、JC と家庭、JC と仕事、どちらを取るかといわれれば、家庭と仕事を取るべきであると考えている。優先順位を意識し、時には JC を休む勇気を持つことも必要である。迷わず家庭や会社に帰り、問題を解決することに全力で取り組んでもらいたい。そして、身近な人たちの笑顔が戻ったとき、その時にはまた JC に帰ってきてくれればいい。

しかし、同時に私たちは地域から多くの期待を背負って他人から誇りに思われる人間にならなければならない。家庭に帰れば、一家の大黒柱としての背中をみせなければならない。職場に戻れば、リーダーとして仲間を引っ張っていかなくてはならない。すべてをうまくこなしながら、基力である人間力・指導力を養うには、少し背伸びをし、自分の器を広げる必要がある。

そして限られた時間の中、妥協することなくまちづくりの事業を行う過程は、自分自身を修練し成長させるのに大いに役立つのである。その為に何もかも全力で取り組んでいただきたい。真剣だから、とことん熱くなれる。本気だから、妥協せず最後の最後まで練り上げられる。全力を尽くすから、人間は成長するのである。まつやまのためという前に、まず自分自身の成長を意識し、成長した自分を家庭や職場で見てもらおうことを考えてほしい。そして、私たちの成長は、必ずみんなに誇れるまつやまの創造へ繋がっていくだろう。

## 何事も段取り八分、仕事二分

私は何をやるにしても「段取り八分、仕事二分」だと幼いときから教えられてきた。JC で事業を進めていく中で必要な事業計画の立案、予算の組み立て、メンバーへの指導力、どれをとっても会社の経営を含むすべてのことにおいて大事だと考える。

段取り八分というように、物事は準備の段階でほぼすべてが決まるといっても過言ではない。ほぼ完璧に準備できたとしても、実施してみるとその準備段階で思っていることの8割できれば良い方である。また、実施段階で何も問題がないという問題意識が抜け落ちることはさらに危険を負う。さらに、忘れてはならないことは、次に繋げるために、しっかりと検証し報告することである。誰の目にも分かるように報告ができてこそ、はじめてその事業が完結するのである。そして、諸会議の運営においては、貴重

な時間を使うのだから効率的で生産性の高い設営・運営が必要であり、それが JC 運動の基盤を担っているのだ。揺るぎない基盤で JC 運動を支え、運動の効果の最大化を図ることが、あらゆる点で松山 JC の価値、魅力を高めることに繋がるのである。

## 外の釜でめしを食う

現在、松山 JC は四国で最大数のメンバーを抱える LOM である。その責務としてもっと外に目を向けることが大事であり、積極的に四国地区、愛媛ブロックに参画しなければならない。不況といわれるこの世の中、本当の意味で地域間の連携が必要であり、愛媛、四国、そして日本が協力し結束することにより、閉塞感が払拭されるのである。

また、各々の身の丈の範囲でかまわないので 本会・地区・ブロックに出向し、LOM の外に飛び出して経験を積んできてほしい。そして、LOM メンバーに支えられてはじめて出向できることに感謝し、個人間の友情を育むとともに、出向先で得た知識を LOM に持ち帰って地域に活かしてほしい。

## 「JCもある時代」

私たちは、自らも修練しながらまつやまのために活動を行っている。しかし、事業実施までの苦しさや、実施後の達成感だけにとどまっていないだろうか。事業の本来の目的や内容がどれだけ達成されたか、事業自体の実施意義はどうだったかなど、客観的な検証を怠りがちである。地域や市民のためと思い事業を実施しているが、実は本当に必要な事業かどうかは実施している当事者には判断できない。

昔は地域に根ざした運動を展開する組織は JC しかなかった。だが、NGO や NPO など、ボランティア団体や市民活動団体に対する法整備が進み、明確な活動目的をもった団体が数多く誕生し、一般の人が気軽にまちづくりやボランティアに携わるようになった。その結果、「JC しかない時代」から「JC もある時代」となった。JC は、その活動目的が他の団体と違って明確ではない。その時々理事長が必要だと信じることを行うことのできる大変自由度の高い組織である。だからといって、何をやっても良いことではない。先人達が連綿と積み上げてきた歴史を受け継ぎ、さらにより良い方向に導いて、次世代にバトンを繋ぐ責任が伴ってくる。その責任を考えたとき、大きな事業の実施については、JC 内外で評価されるべきである。第三者を交え、客観的な指標を用いて評価をし、次世代に思いを託す。これこそが単年度制でも持続し続ける JC の姿である。

## まちづくりの前に人づくり

まちづくりの前に何か大事なことを忘れていないだろうか。JC とは本来まちづくりを通して地域における次代のリーダーを育成する団体である。

JC は20歳から40歳までの若く柔軟で発想力豊かなメンバーが修練をする場であり、例え失敗しようとも、やり直しがきく世代であることが最大の利点である。失敗を恐れること無く努力を積み重ねれば必ず報われる。そのような思いで自分の能力を高めることから始めよう。「JC もある」時代の中で主体的にまちづくりをするならば、組織として総合的に非常に高い機能が望まれる。そのためには まちづくりの

前に人づくりというのが現状ではないか。

稀代の実業家である松下幸之助が松下電器はどのような会社ですかと問われたとき

「松下電器は人をつくる会社です。あわせて家電を作っています」

と答えたそうである。

もし私が、JC についてどのような団体ですかと問われたとしたら

「JCはリーダーを育てる組織です。あわせて地域貢献をしています。」

と答える。

縁あってこの JC にいるなら、世の中の役に立つような人間になろうではないか。

### 地に足をつけ持続可能な組織のための会員拡大を推進する

高度成長期を迎え、多くの同志は JC に集まってきたが、1990年代を境にその成長路線も鈍り会員数も減少してきた。このまま何もしなければ各々のメンバーの時間的、資金的な余力もなくなり、このままでは松山 JC も衰退の一途をたどることだろう。

私は JC 運動の根源は会員拡大にあると考える。数はカとまでは言わないが、地に足をつけ持続可能な組織のためには、会員の拡大は必要不可欠である。

まず、新しいメンバーを増やすためには性別や職業を問わず、どんなメンバーでも分け隔て無く活躍できる組織作りを行う。そのためには、私が会員拡大実行委員長に就任し、全LOMで取り組む機運を作ることが必要である。

また、志の高い会員を多く募るには、会社、家族、市民に対して JCの活動を知ってもらい、その活動の中で企業や地域を引っ張るリーダーを育成している団体であることを理解してもらわなければならない。そして入会後には企業や地域にとって費やした時間や会費以上のものを持ち帰っていただくことになるのである。

みんなに誇れるまつやま

私たちが住むこの「まつやま」をどう思っているのだろうか？

恋し、結婚し、母になったこの街で、  
おばあちゃんになりたい！

この言葉は「21世紀に残したいことば」を松山市が「ことばで元気になれる「だから、ことば大募集」」の企画で募集したところ、全国から12,001作品の「ことば」が寄せられ、その中で、松山市長賞を受賞した言葉だ。この言葉ほど郷土への愛着心あふれる言葉があるだろうか。

地域への愛着が痺れているような状況で、この街に住む私たちは、さらに変わりゆくグローバルな社会を認識した上で、独自の未来像を見据えていかなければならない。このことがまさに地域ビジョンの必要性である。

私たちは地域の経済を発展させる使命があるだけでなく、「みんなに誇れるまつやま」の創造が必要

である。そして単に夢で終わるだけでなく、達成可能な身の丈にあったものでなくてはならないし、私たちが成長しても着ていけるものでないとならない。そのためには地域に住み生活し、働きながらこの地域に関わっている私たちこそ自慢できるまちまつやまの将来ビジョンを語り、検証し、修正し、実行していくべきである。そしてまつやまのビジョンを JC が語る良い点は「若さ」である。若い我々には10年後、20年後、30年後もこのまつやまに関わり生きていかなければならない現実がある。だからこそまつやまの未来は他人に決めてもらうのではなく、ただ待つのではなく、積極的にコミットして、まつやまの未来は30年後も松山に居る私たちが決めるべきである。そのタイミングとして2011年は創立59年目の年であり、過去を検証し未来へ繋ぐ良い機会でもある。また2020年まちづくりビジョンを策定した最初の年でもあり、その実現のためにどのような行動計画を立てるかが重要でもある。そのことは市民と共に歩んだ松山 JC の60周年記念事業として結実させるべく、積極的な議論を展開するものである。また、松山 JC の未来＝まつやまの未来＝自分の未来であることを忘れてはならない。そのために松山 JC では第63回全国会員大会の誘致を決議し、更なる地域の発展の一助として積極的な取り組みを行っていくのである。

## 公益性を意識し市民の心の琴線に響き メンバーの成長に繋がる運動を推進する

2007年の総会にて公益社団法人格に移行する決議をした。決議以降松山青年会議所では組織の仕組みや財政的な部分でその準備を進めてきた訳だが、会員の心構えという点ではまだまだ不十分だと考える。体裁だけ進めてみても組織は変わらないし、一番大事な部分である心構えができていないのでは意味がない。公益社団法人格の取得の準備のため、会員の心構えの部分をしっかり啓発することを心がけながら、ことを進めるべきである。

その為には市民とまつやまの問題に対して、問題解決にしっかりと手を取りあって取り組むべきであり。またその中で市民には JC 運動を直接発信することにより私たちが推進する運動が理解される機会として、例会事業を可能な限り公開事業にするべきだと考える。ただ公益社団法人を取得するためだけにこのような手段をとるのではなく、忘れてはならないのは、本当の意味での「市民の意識変革」に繋がるような例会の運営を意識しなければならないということだ。公開例会を通して市民に良い意味で興味や感銘を持たれるようにするべきである。また公開例会を行うにあたって最も意識しなければならないことは、「JC もある」時代で JC でなければできない運営を意識しなければならない。

さらに言えば、もしその運動が他の団体と連携することにより良いものになるならばその運動を他の団体と一緒に進めるべきだと考える。

メンバー向けの例会の運営については年間を通じて出席することにより、メンバーの JC 運動に対する意識の高揚が図れる例会を企画、運営しなければならない。各々の JC 活動に関する意識の高揚、資質の向上、そして終生にわたる友情を育てていけるような例会を運営していくべきである。

## 新しい試み

JC は、1年限りの任期いわゆる単年度制である。その1年間の中でできることには限りがある。その限りある活動期間の中で松山 JC は長期にわたる継続事業として祭り、シンポ、わんぱく相撲というす

ばらしい事業を展開してきた。これらの事業は行政とのタイアップ事業、青少年に携わる事業など様々な事業のお手本となる事業であるが、せっかくJCに入ったのに1つの委員会で貴重な1年間をそれだけに関わるということは、他の事業に関わる機会が少なくなることとなり、志の高い有能な人材が在籍するこの組織では非常に効率が悪い。さらに言えば現在メンバーの平均在籍年数が短くなり、会員数が減少するという背景を考えると、通常の委員会に加え継続事業については実行委員会で運営すれば効率がいいと考える。そうすればメンバーが通常の委員会以外で効率よく様々な事業に関わることになり、事業や人に関わる機会を増やすことに繋がり、さらに友情を育み、修練による自己成長の機会を増やすことにより組織の活性化に繋がることとなると考える。

## -道-

日本には「道」という概念がある。日本特有の文化として華道、柔道に代表されるように、日本における価値観や哲学を表しており、1つの物事を通じて生き様や真理の追究を体現することや自己の精神を指すものだ。

今までの私の人生を振り返ると、若く経験が少ない時は傲慢かもしれないが、自分には無限の可能性があり、自分なら1人で何でもできると頑なに信じてきた。自分の確固たる意思があるからこそ、そこに道が開けてくると信じて、突き進んできた。そしてそこで成果を上げたときには、かつて経験したことのないような達成感があった。

だがそれは会社、友人、家族、みんなの協力があつたからこそ、その道を歩めたことに気付かされた。

人生を道とするなら、ちょうど折り返し地点にさしかかるところだろう。

JCを道とするなら、今まさにゴールにさしかかるところだ。

### **私は誓う。**

それは、これまでの私の人生で支えてくれた人たちに感謝し、その思いに報いること。

そして、私が今まで経験したことをJCや地域に活かすべく基力を尽くし、

みんなの協力をもって、世にはびこる閉塞感に対し若さとたぐいまれな気力で挑戦することである。

**いま、踏みだそう！みんなに誇れるまつやまに向けて!!**